



ハヤカワ文庫 〈JA78〉

う た
歌麿さま参る
光瀬 龍

早川書房

著者略歴 昭和28年東京教育大学
理学部卒業後哲学科に学ぶ SF
作家 主著者「たそがれに還る」
「百億の昼と千億の夜」「喪われ
た都市の記録」「征東都督府」「寛
永無明剣」(以上早川書房刊)他
多数あり

HM=Hayakawa Mystery
SF=Science Fiction
JA=Japanese Author
NV=Novel

う た
歌麿さま参る

〈JA78〉

昭和五十一年五月二十日 印刷
昭和五十一年五月三十一日 発行

(定価はカバーに表
示してあります)

著 者 光 瀬 龍

発 行 者 早 川 清

印 刷 所 東 儀 俊 邦

発 行 所 株式 会社 早 川 書 房

郵便番号 一〇一

東京都千代田区神田多町二丁目二
電話東京(二五四)一五五一(代)
振替番号 東京・六一四七七九

乱丁本・落丁本は本社またはお買求
めの書店にてお取替えいたします。

印刷・誠友印刷株式会社 製本・株式会社明光社

〈JA78〉

う た
歌 曆 さま 参る

光 瀬 龍

早 川 書 房

379

目次

関ヶ原始末……………	七
三浦縦横斎異聞……………	五
ペニシリノ一六一一大江戸プラス……………	七
勝軍明王まいる……………	一三
紺屋町御用聞異聞……………	一七一
歌麿 ^{うた} さま参る……………	二〇七

装幀・挿絵／石井三春

歌^う曆^たさま参る

関ヶ原始末

1

昨夜からの豪雨は、今朝になっても少しもおとろえを見せない。厚い雨脚に押しつつまれたこの盆地の底から、水けむりにかすむ周囲の屋根を見上げるとき、物みなすべて水底にあるかの如く見えた。

銃声と喚声が入り乱れ、ひとつになつてつなみのように盆地全体をゆり動かしていた。時おり、何かの拍子に一人だけの悲鳴や絶叫がいやにはっきりと聞こえることがある。

水幕の中から、まぼろしのように数騎の騎馬武者の姿があらわれ、どろ水を蹴立てて疾駆してゆく。ふいにそれがふた手に分れ、からみ合いぶつかり合った。長槍と太刀が噛み合つて齒の浮くようなひびきを發した。たちまち一人の武者が落馬し、他はあらわれたときと同じように、ふたたび篠つく雨の中へ駆けこんでいった。

馬から落ちた武士は、苦痛にうめきながら、のたうつようにどろの中を這った。這った跡が、赤い帯をのべたように染っている。

盲めっぽうに這いずっているのかと思ったがそうではなく、その武士は松の根方に立っている半蔵を目指して這い寄ってくるのだった。その顔から完全に生氣が失われている。なまり色に翳った目を、重たげに見開き、必死にくちびるを動かす。

はて、やっかいな。

半蔵は顔をしかめた。戦場で情は無用だった。しかもこのような乱軍の中で、いちいち臨終の言葉など聞いてやるひまもないし、心のゆとりもない。

やれやれ。さいごの言葉を遺したいのは、こちらの方よ。

半蔵はつぶやいた。

傷ついた武士は、もうそこまで這ってきた。半蔵に向かってさしのべた手が虚空をつかんだ。

「たのむ……」

たしかにそう言っている。その口から、くわっと血の塊が吐き出された。

「そこなご仁。たのむ……」

半蔵は小さく舌打ちをくると、二、三步足を運んで、その武士のかたわらに身をかがめた。

「なんじゃ？」

胸丸の脇が突き壊され、そこから間欠的に血があふれ出てくる。

「たのむ。わしを三州池鯉鮒ちりふまで運んでくれ」

半蔵は自分の耳の聞きちがいかと思った。

「どこへ運べたと？」

「池鯉鮒だ」

「お主をか？」

「そうだ。たのむ」

血とどろにまみれたその武士は、残った力をふりしぼって半蔵の足首をとらえた。

「きつと悪いようにはせぬ。扶持か、黄金か、思いのままになるだろう」

助かりたい一心から、こんなときには誰でも同じようなことを口にする。だが、この武士の言葉には、異様な執念があった。だいいち、わざわざ三州池鯉鮒まで運んでくれ、というのが、玉の緒にすがろうとする者の言葉らしくなかった。『死にたくない』『助けてくれ』と言えは尋常だが。

「無理だ。その傷では三州どころか、垂井までもおぼつかないぞ。言え。何か言い残したいことがあったら聞こう」

半蔵は瀕死の武士に足首をあずけたまま、その耳に口を寄せた。

「たのむ。運んでくれ」

その目にはげしい焦燥が浮かんた。呼吸が咳きこむように断続した。もう長いことはないだろう。

しかたがない。のりかかった舟だった。

「わかった。運んでやろう」

かかえ起して背に負った。もう何もかも終りで、こんなところにまだ自分のやることが残って

いた、というのがふしぎだった。

「かたじけない。お主の名は？」

服部半蔵、

と、名乗ろうとして、ぐっと呑みこんだ。

この事態のもとで、徳川旗本としてのおのれの名をあかすことは危険だったし、その必要もなかった。

「服部……作右衛門だ」

「御味方か？」

御味方か？ とたずねられても、相手がどちら側なのか見当がつかない。池鯉鮒まで運んでいってくれ、と言ったとて、それが三河縁故すなわち徳川方とはかぎらない。臨終いまわの際に誰かに会いたくなったものであろう。関東方でも大坂方でも、名のある者もそうでない者も、一族が手分けして東と西に分れ、故意に敵味方となって戦っているのが実情だった。天下分目の戦いともなると、一族が根絶やしにならぬようとの当然の配慮だった。

「そうだ。味方だ」

半蔵はうなずいた。

傷ついた武士は、安心したのか、半蔵の肩にがっくりと体重をかけた。

「しっかりしろ！ お主の名を聞いておこう」

脇腹を小突いた。

「名張の申^{さる}じゃ」

「名張の？　すると、猿飛という」

「そんなふうに言われている」

「そうか！　お主が猿飛か」

半蔵の胸の中をつめたいものがはしった。

真田左衛門尉幸村の郎党の一人に、乱破^{らんぱ}をとくいとす名張の猿飛という者のあることは、用忍を事とし、透破^{すっぱ}、乱破に従う者たちの間では以前から知られていた。

代々真田家では、小身の故をもつて強兵を養うことができぬまま、出自の如何を問わず、天文、地象、また諸国の事情などに通じている者を広く召しかかえ、計略をもつて戦うことを骨子とした。それは十分、成功したようだった。由利鎌之助、海野六郎、名張の申などを中心とする幸村子飼の郎党たちは、他家の家臣たちには類を見ない特殊な戦力を生み出していた。

半蔵も、猿飛と称されるこの男に会うのは、今がはじめてだったが、そのおそろしい技量について、すでに耳にたこができるほど聞かされていた。実際、それは聞きしに勝るものと思われた。もともと乱破などというものは、そのはたらきは決して表にあらわれるものではない。乱破にゆすぶられてひどい目にあった相手方でも、それをおおやけにするはずはないので、その被害が人の耳目に触れるような場合でも、実情はそれに何倍かするようなありさまだった。

真田の郎党たちの間でも、名張の申は諸家の間の斡旋や調停に長け、内部事情などに精通していた。暗殺や放火などをとくいとす由利鎌之助、築城や水利などを専らとする海野六郎などと

異なつて、申は多年、京、大坂にあって活動をつづけていた。

半蔵は、申を刺してしまいたい欲望をおさえるのに苦心した。今なら完全に申の息の根を止めることができる。腰の脇差に、何度か手が動きかけた。西軍の勝利の何十分の一、何百分の一かは、かれの手柄でもあるはずであつた。

いや。まで！ 申が何故、三州池鯉鮒へ行きたがつているのか、もし申が命長らえてそこへたどり着けるならば、それははっきりする。やつの生命を奪うのは、それからでも遅くはない。

半蔵はおのれに言いきかせた。申が何故、瀕死の身を敵地である池鯉鮒へ運ばなければならぬのか？ そこに何か大きな理由があるはずだつた。半蔵の、忍び者の血が騒いだ。

半蔵は申を背に、豪雨と血とどろの戦場を一步、一步、あとにした。

「までまで！ どこへ行く」

道路に沿つた竹垣がばりばりと押し破られ、数人の武士たちがおどり出してきた。

拔身をひっさげ、わらわらと半蔵をとり囲んだ。

「名乗れい！」

全身から幽鬼のように血の匂いを発散させている。みな、切り取った耳や削ぎ落した鼻を紐に通して首や腰にぶら下げている。乱戦の中では、せっかく討ち取った敵の首でも、提げているわけにはいかない。そこで耳や鼻で代用する。のちの証拠というわけである。

そんなのを三つも四つも提げているのもいる。それが半蔵に太刀を突きつけた。

「名乗らねば、斬る！」

しかたなく半蔵は口を開いた。

「服部作左衛門。宇喜多秀家さま、御陣場借の者だ」

言ってからひやりとした。かれらが宇喜多家の家臣だったら万事休すだった。

「宇喜多どの御陣場借とな？　して、その背なる人物は？」

「おれの知り人で、真田どのの旗本。名張の申じゃ」

首のかわりに切り取った耳や鼻を持ち歩いているなどは、これはあきらかに勝ち戦さの側の風態である。戦功をかき集めるのに忙しいのだ。負けた方は、首など提げていったところで、もはや一文の稼ぎにもならないから、そんな物には目もくれない。

かれらは、あきらかに大坂方である。真田の郎党、名張の申の名を持ち出せば信用するであろうと思った。

「真田の家中で、音に聞えたあの用忍の頭か！」

「おう。あの猿飛どのか！　手傷を負われてか」

果して、かれらは形をやわらげ、痛ましそうに半蔵の背をのぞきこんだ。

「服部作左衛門とやら」

さっきから、半蔵につめたい視線を注いでいたかれらの頭領株の男が、手にした太刀で、半蔵が足を向けていた方角を指し示した。

「これをゆけば上野から二又だ。なぜ東へ向う？」